

金融ジェロントロジー

野瀬 隆平

七十歳代の女性が、自宅にあった現金数百万円をだまし取られた。ニュースでよく聞く詐欺の話だ。

高齢者がお金を持っているのは、そんなに特別なことではない。ただ、高額のお金を現金で自宅に置いてあるというのは驚きである。少なくとも自分は、自宅にそんなに多額の現金を保管していない。

キャッシュレス決済が浸透し、特にコロナ禍のもとで現金での支払いが敬遠されるようになったというのに、日本ではお金の発行額が毎年伸びているという。しかも、コロナの影響があった2021年に、その伸び率が急激に高くなった。一見、矛盾しているようなこの現象、実は我が国だけでなく海外でも起きているようだ。

その理由として考えられるのが、社会の高齢化である。特に日本では、年齢が高くなるほど現金を持っていたいという気持ちが強くなり、銀行に預けてもほとんど利息が付かないこともあって、タンス預金をするようになる。もう一つは、高齢者の多くがデジタル決済に慣れていないことだ。スイカのように、カードをかざすだけで支払えるのなら良いが、スマホに予めアプリを入れておかなければとなると、私自身を顧みても難しいだろう。

現金の使い方をより詳しく見ると、紙幣に比べて硬貨はあまり使われなくなっているのが分る。比較的額の小さな買い物はスイカなどで決済するようになった為と、ゆうちょ銀行をはじめ市中銀行が、硬貨を入金する場合に手数料を取り始めたことも影響しているのだろう。逆に、高齢になるほど紙幣で高額の支払いをする傾向が高くなる。これは、統計データにもはっきりと表れている。

若年層が多い新興国では新しいデジタル・システムに対応できるが、日本のように高齢化が進んだ国では馴染めぬ人が多く、新しいシステムに移行できないでいる実態が見えて来る。

このように高齢社会が金銭に与える影響を研究する学問の分野があり、「金融ジェロントロジー（老年学）」と呼ばれているそうである。